

出エジプト記32章7-14節  
テモテへの手紙1章12-17節  
ルカによる福音書第15章1-10節

本日の旧約日課は、「主はモーセに告げられた。「急いで下りなさい。あなたがエジプトの地から導き上った民は墮落してしまった」と唐突に始まります。以前の聖書日課は、32章1節がありました。そこには「モーセが山からなかなか下りて来ないのを見て、民はアロンのもとに集まって言った。『さあ、私たちに先立って進む神々を私たちのために造ってください。私たちをエジプトの地から導き上った人、あのモーセがどうなったのか、分からないからです』」とイスラエルの民の墮落の内容が書かれていました。

主なる神様に導かれ、モーセに率いられ、エジプトでの苦役から解放され、約束の地を目指すイスラエルの民なのですが、その途中の姿は決して模範的な信仰者というものではありませんでした。むしろ、不平不満ばかり、間違った選択も多く、その最大の事柄といえるのが、本日の箇所にある「神々を私たちのために造ってください」という願いであったといえます。イスラエルの民は、山に登ったモーセがなかなか戻らないので不安になり、アロンを新しいリーダーとします。そして、みんなが持っている金（きん）を集めて、子牛の鑄造を作り「イスラエルよ、これがあなたの神だ。これがあなたをエジプトの地から導き上ったのだ」と礼拝してしまうのです（出エ32:2-6）。これに対して主なる神様は激しく怒り、本日の箇所が続きます。

イスラエルの人々の視点に立てば、荒野という不安しかないような場所で、リーダーが長期不在となり、まさに全滅の危機に瀕していたわけです。その危機を乗り越えるために、ただ待つのではなく、新しいリーダーを決めるのは必要かつ理性的な判断であったといえます。また、自分たちを導いている神がどのような方であるかを、鑄造という明確な形で示し、今の困難を乗り越えようとするこゝも、合理的な判断であったといえます。ただ待つだけ、という判断を超えた、前向きな判断であったともいえます。その意味では、イスラエルの人々を責められないような気がします。しかし、その判断は『聖書』的には間違いでした。人間の理解と願望の範囲にある神的存在は、『聖書』が示す主なる神様ではないからです。

本日の箇所の中心、9節から14節には、主なる神様がイスラエルの民を「滅びし尽くす」と怒り、それをモーセがなだめるという対話があります。ご自分の民に対して怒る神様を、モーセが「どうしてエジプト人に、『あの神は悪意をもって彼らを導き出し、山の上で彼らを殺し、地の面から滅ぼし尽くした』と言わせてよいでしょう」（出エ32:12）と、冷静かつ理性的になだめるのです。そのモーセの執り成しもあって、「それで主は、ご自分の民に下すと告げた災いを思い直された」（出エ32:14）と本日のお話は終わります。本日の聖書日課はそれで終わりますが、出エジプトのお話は続きます。本日の箇所でも理性的な行動をしたモーセも、山から下りて、「宿営に近づくと、子牛の像と踊りが目に入った。そこで、モーセの怒りは燃え、手にしていた板を投げつけ、山の麓で打ち

砕いた」のでした（出エ 32：19）。今度はモーセが怒り、理性を失って、頂いたばかりの十戒の板を投げて壊してしまうのです。本日の旧約日課は、理性と信仰との関係という難しい内容を語っているといえますが、それは福音書も同じです。

本日の福音書は、有名であると同時に、イエス様の代表的な教えの一つともいわれます。まず100匹の羊の話を考えてみますと、100匹のうち、1匹が行方不明になったらどうするかという問いがあります。イエス様の答えは、99匹を残して1匹を探しにいき、見つけたら大きな喜びがあるというものです。この譬えだけはマタイ福音書にもありますが、ルカ福音書の文脈では、この譬えにあとに、数を変えた同じ構造の譬えが続きます。10枚の銀貨の譬え、そして本日の聖書日課にはありませんが、放蕩息子の譬えです。99対1、9対1、1対1と比率を変えた譬えが続くのです。ルカ福音書全体から考えますと、これらの譬えが示そうとしている事柄は、悔い改めることの重要性であると考えられます。つまり、この譬えは、一人が悔い改めて主に立ち返ることの尊さを語っているということです。ただし、イエス様がこの譬えを語られた時は、そのような悔い改めが中心のテーマではなかったと思います。

それでは、このような比率が変化・連続する譬えを用いて、イエス様が何を教えようとしておられたのでしょうか。それは正確には分かりませんので、推測するしかありません。しかしおそらく、今、確実に失われようとしているものについて、どうするのかという問いであったと思います。数は、そのことを明確にする題材でしかないのです。しかし、人間は数のことだけに注目する時、99を危険にさらすならば、1の犠牲ぐらゐは仕方がないと判断してしまう場合があります。しかし、9対1、1対1と比率を変えて比較する時、1が失われること自体に何も変化はないのですが、それが失われる重さが変わります。だから、大切なのは、数の問題ではないとイエス様は教えておられるのです。逆に比率が、999対1、9999対1となれば、人間の理性的判断は、1の重みをより軽くしてしまうでしょう。一人の人が失われても気にされない人間関係は、主なる神様が望む関係ではない、それがイエス様の教えです。しかし、現代は、そのようなイエス様の教えを、逆手に取った理性的判断もあります。それは様々な意味での少数者、すなわち1からの視点がすべての基準になるという判断です。1が絶対的存在となり、1のために比率に関係なくそれ以外のすべてが、共存するために、あるいはよりよい世界をつくために、その判断や要求を受け入れなさいという理解です。それはイエス様の教えとは異なるものでしょう。

出エジプトという出来事において、40年にわたる旅をした第一世代は全滅します。しかし、ヨシュアに率いられた次の世代がカナンの地に入り、イスラエルという存在を継承します。その意味では、出エジプトの歩みで滅んでしまった世代の人たちの歩みは、その失敗も不安も無駄ではなかったのです。未来の希望へとつながったからです。わたしたちは、より明確な方に率いられています。その方とはもちろんイエス様です。モーセが率いた出エジプトの出来事自体を、人間一人の生涯にたとえるならば、わたしたちは、イエス様に率いられているがゆえに、不安はあっても、永遠の命という確実な未来へと導かれるのです。そのようにして導かれ歩む私たちの姿を通して、主なる神様の存在を、これからも世界に示していきたいと思えます。